

# 応用型大学における第二外国語としての日本語教育

—山東省済南市にある某応用型大学の調査を通して—

劉 樂 樂<sup>†</sup>

Japanese Education as a Second Foreign Language in Applied University

—Taking an Applied University in Shandong Jinan as an Example

LIU Lele

## Abstract

With the rapid spread of higher education in China, applied universities have become more important than ever. Methods of operation, composition of the faculty, and the nature of education are attracting more attention than ever before. With the rapid development of Japanese language education and active exchange between Japan and China, the number of Japanese language learners is steadily increasing, and universities are playing a leadership role in Japanese language education.

There are more students who study Japanese as a second language than those who specialize in Japanese. In order to understand the status of Japanese language education as a second language at applied universities, we conducted a questionnaire survey mainly among students majoring in computer science at applied universities in Jinan. In this paper, I would like to discover the shortcomings in the classroom in terms of school policy, teacher composition, students' motivation to learn a second foreign language, learning objectives, curriculum, teaching mode and materials, and explore countermeasures.

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学大学院 人間環境学研究科 博士後期課程

草稿提出日 6月30日

最終原稿提出日 8月25日

キーワード：応用型大学，第二外国語としての日本語，教育現状，対策

Keywords: applied University, Japanese as a second foreign language, current Teaching situations, measures

## 一. 問題の提起と目的

日本は中国の隣国であり，1972年に両国の外交が正常化して以来，各領域での交流活動が頻繁になり，特に「改革開放」以来，中国との貿易も非常に盛んになった。日本企業は徐々に中国市場に参入し，1980年代以降，世界経済の発展及びグローバル化の進展に伴い，日本のアニメーションや電子製品は中国を始め世界中で流行した。この時期から日本語学習が注目されるようになった。21世紀に入り，日本語の学習が世界中で盛んになり，特にアジアではブームになった。日本語学習者が増え，日本語教育もますます発展した。

中国でも日本語ができる人は必要な人材と見なされるようになった。それにつれて，日本語学習者の数は年々劇的に増加し続けている。特に2001年に中国がWTOに加盟した後，外国語専門の学生は企業に求められ，非常に人気が高まった。

このような状況により中国の「日本語教育」は，新しい時代に入ったとされることが多々ある。21世紀以降，中国の高等教育は徐々に普及し，急速に発展してきた。中国のほぼすべての大学では日本語専門や，第二外国語として日本語の授業を開設し，大学での日本語の教育も非常に重要な役割を果たしている。

本論文では，「応用型大学」における第二外国語としての日本教育に関する調査を行い，自らの教育経験を基に，多くの関連文献と理論を参照し，学校の方針，教師の構成，学生の第二外国語学習の動機，学習目標，カリキュラム，授業方式，教材などの観点から，問題を発見し，対策を探りたいと思う。その結果を今後の応用型大学の第二外国語としての日本語教育改革に参考として提供するものである。

## 二. 関連概念の説明及び先行研究

### (一) 関連概念の説明

#### 1. 応用型大学

国際連合教育科学文化機関 (UNESCO) が2011年に公表した「国際標準教育分類」を踏まえて中国教育部では高等教育の分類に着手するようになった。その結果，人材育成のモデルとして「学術型人材」，「応用型人材」，「技術型人材」を挙げ，それぞれに焦点をあてた教育タイプを設けるに至った。それによって，現在，中国の大学は，研究型大学，応用型大学，高等職業専門学校に分類される。応用型大学とは，研究ではなく実践応用に基づ

いた大学を指す。研究型大学の概念とは対照的に、応用技術大学、研究応用型大学等に分けられる。2014年に国務院が公表した「現代的職業教育の発展を加速させることに関する決定」に応用型大学教育は、中国の経済社会の発展、高度な応用型人材の需要及び中国の高等教育の普及、促進に重要な役割を果たしてきたと明記されている。

応用型大学は、中国の大学教育の特徴に基づき、中国の経済発展の近代化と高等教育の普及に伴い生まれた新しいタイプの大学教育である。応用型大学には、単純技能型の理工系専門が多く、独自の人材育成目標、育成方式、評価基準がある。

1980年代以来、高等教育界では、実践的な教育を重視し、応用型人材の育成を強化する風潮により、多くの中国の大学は、教育改革を通じて実践的環境の強化に力を入れた。なぜなら、実践的教育は学生の实践能力と革新能力を育成するために重要である。

## 2. 日本語教育と第二外国語としての日本語教育

日本語教育が目標とするのは、一定の学習方法を通じて、日本語とそれに関連する日本の文化、習慣、経済、教育、社会についての知識を身につけることである。迫田（2002）は日本語教育をJFL（Japanese as a Foreign Language、外国語としての日本語）とJSL（Japanese as a Second Language、第二言語としての日本語）に分けた。それを踏まえて韓・江（2012）は中国の大学で行われる日本語教育を①日本語専攻；②一般日本語教育（選択科目、通称「大学日本語」）；③第二外国語；④集中日本語コース（日本語を第二専攻とする日本語集中コース）に分類した。

第二外国語としての日本の教育は、広義には日本語専攻以外の日本語教育である。日本語学部の日本語専攻を除いて、他の日本語教育はすべて第二外国語としての日本語教育と呼ばれる。狭義では、大学で英語が必須科目として英語教育を行い、英語以外の外国語教育は第二外国語と呼ばれる。第二外国語としての日本語教育は、その第二外国語が日本語であることを指す。この論文で問題にする第二外国語としての日本語教育は後者に属す。

### （二）中国の日本語教育現状に関する研究

天津外国語大学の教授である修（2008）は、異文化コミュニケーションスキルの育成を重視すべきであり学生の自主学習、共同学習の能力を向上させるために、基礎日本語教育のタスクを再検討する必要があると主張した。石（2011）は、第二外国語としての日本語教育における普遍的な問題を例に挙げた。例えば、シラバス設定の非合理性、学習者の個人的要因（学習目標が明確ではない、学習意欲の欠如など）、教師の要因（授業方式や観念の変更など）である。

第二外国語としての日本語教育の現状に関する研究において、尹(2015)は、中国の日本語の教育の重要性、大学における第二外国語としての日本語教育の現状と教育の質を向上させるための対策から分析した。許(2016)は、独立学院の第二外国語教育に多くの問題があると指摘した。学習と教育の主体、日中関係の3つの側面から既存の問題を分析し、現状に基づいた改革措置を提案した。

### 三. 調査方法

本研究では、主にアンケート調査、インタビューを行う。

#### (一) アンケート調査

調査、研究の目的に応じ、アンケートを作成し、山東省済南市にある某応用型大学で情報を専攻する学生を対象にアンケートを実施した。回答を収集し、有効回答に対して統計、分析を実施する。

##### 1. 調査対象

このアンケート調査では、山東省済南市にある某応用型大学において、2017年に入学した情報学部の第二外国語に日本語を選んだ347名の学生に実施した。その中には、コンピュータ科学と技術専門129名、情報管理と情報システム専門86名、人工知能専門75名、ビッグデータ専門57名が含まれる。

##### 2. アンケートの作成と実施

この第二外国語としての日本語教育の現状に関するアンケート内容・方法は、多くの関連論文を閲覧し、一部の研究者の調査内容を参考にした。例えば陳(2011)は、第二外国語としての日本語教学習者が明確な学習目的を持ってない特徴を論及した。それによって、従来の教師、テキストを中心にした授業方式における注目すべく問題点を参考にした。吳(2014)は、研究型大学英語専攻の学生を対象に、第二外国語としての日本語教育の問題と対策をまとめた。それを参考にし、応用型大学の学生が第二外国語としての日本語学習への目的、教科書、日本語授業に対する意見とアドバイスに関するアンケート内容を作成した。王(2005)は、学習動機の類型、強度と動機の変化の相関性について分析した。それを参考にし、学生が第二外国語としての日本語学習への動機、自主性に関するアンケート内容を作成した。姜(2013)は、研究型大学に属する総合大学と理工科大学の英語専攻の学生を対象に、第二外国語としての日本語の学習効果を比較した。本論文の日本語学習

への時間投入、学習の難点、成果の部分ではそれを参考にした。日本語授業の形式へのアドバイス、興味については、孫（2015）の授業におけるネット資源の応用と学生の学習意欲の変化に関する内容を参考にした。

これらの論文をもとに、対象大学での日本語教育の実情に合わせて調整し、日本語専門の教師の意見に基づきアンケートの内容を決定した。そして、アンケートの真実性と妥当性を確保するために、正式に調査を実施する前に第二外国語として日本語を学ぶ2016年入学の学生から20名を無作為に選択し、アンケートを配布した。回収した回答を分析し、アンケートの不合理な部分を修正し、妥当性を確認した。

## （二）インタビュー

インタビューの質問を作成し、サンプル教師を選び、教師の授業状況を把握する。そのほか、学生に対しグループインタビューと個別インタビューを実施し、第二外国語としての日本語の学習状況を把握するようにつとめた。

### 1. インタビュー対象

このインタビューは、学生インタビューと教師インタビューに分けられる。

2017年入学のコンピュータ科学と技術専門のクラス（コンピュータ科学と技術専門2017年度1組）を選び、そのクラスの学生29名をグループインタビューの対象とした。そして、第二外国語として日本語を選ぶ2017年入学の情報関係専門の学生5名を無作為に選び、個別インタビューの対象とした。情報専門の学生の日本語授業を担当する教師4名に対し、インタビューを通じ、日本語教育の現状についての意見を伺った。

### 2. インタビューの目的

山東省済南市にある某応用型大学で行っている第二外国語としての日本語教育における学生の学習状況と教師の指導状況をよく把握した上、問題点を探索する。

### 3. インタビューの内容

学生へのインタビュー内容は次の通りである。

第二外国語としての日本語学習への学生の関心、学習意欲、学習に費やす時間、日本語学習の難点、教師と授業に対する満足度、教材に対する意見等の面で学生に聞き取り調査を実施した。

教師へのインタビュー内容は次の通りである。

第二外国語としての日本語授業を担当する教師のレベル，教師の指導方法，教師の仕事量およびカリキュラム設置の合理性，現在行っている授業の感想，教材の選択，仕事への要望，大学側への意見，アドバイスとした。

#### 4. インタビューの展開

調査内容にあわせて，学生や教師へのインタビューの概要を事前に作成した。このインタビューは，2020-2021年度一学期（2020年10月）に実施した。学生のグループインタビューはTencent Meeting<sup>1)</sup>を使って1時間，個人インタビューはwechat<sup>2)</sup>を使い，一対一で各30分行われた。教師へのインタビューもwechatで行われ，一人約一時間で聞き取り調査を実施した。

新型コロナウイルスの影響で，インタビューはリモート形式で実施したが，教師も学生も共に積極的に協力してくれ，円滑に進めることができた。

### 四. 統計と分析

#### (一) アンケートの統計と分析

この調査では有効なアンケート347通で得られたデータをもとに，2016年入学の学生へのアンケート結果との比較を行った結果，大きい差異が見受けられなかったため，統計，分析を行い，応用型大学における第二外国語として日本語を勉強する学習現状を全面的に把握する根拠とする。

このアンケート調査では，学生の日本語学習以前の日本という国を意識した契機，日本語を学ぶ動機，勉強への取り組み，興味，学習の目的，日本語の勉強に費やす時間，学習の難点，教科書の難易度，学習成果，そしてこれからの日本語学習に対する期待と提案に分けて行った。

#### 1. 日本語を学ぶ前に日本を意識した契機

表4-1 日本語を学ぶ前に日本を意識した契機

意識した瞬間	映画，漫画，ゲームなど	日本に居る親戚や，友人	大学での講義	わからない
人数(名)	218	21	41	67
割合	62.8%	6.1%	11.8%	19.3%

ライトバウン・スパダ(2014)によると，認知心理学の立場では人が生まれながらに持っているのは学習能力で，学習というのがどういうプロセスで起こるのかを明らかにし

ようとしている。認知主体の脳内の認知構造は認知対象情報に影響を与える。香港における動機づけに関する研究では、20代後半から40代前半までの生涯学習・日本語学習を対象にした瀬尾(2011)の調査では、「将来日本の会社で働く」といった自分のキャリアのため(外発的動機づけ)ではなく、「ポップカルチャー」、「日本文化」、「日本旅行」といった「興味」(内発的動機づけ)が強いほうが、学習意欲が継続することが挙げられている。上述により新しい言語として日本語を学ぶ前、学生は日本と日本語について意識した経験を持つことは学習動機、興味にある程度影響を与えていると考えられる。

表4-1の結果からも、第二外国語として日本語を選択する直接的な理由にも繋がっていると見受けられる(対象大学の第二外国語には、日本語とロシア語があり、2017年に入学した情報専門の4クラス416名の学生の中、347名が日本語を選択し、83.4%を占め、その他、69名がロシア語を選択、16.6%を占めた)。約70%の学生が、大学入学前に日本を意識している一方で、11.8%の学生は大学にて講義中に触れた日本に関する知識を通じて日本を知った。また、19.3%の学生は日本と日本語については全く知らない結果となった。

## 2. 第二外国語としての日本語学習への動機、自主性、興味

以下の表4-2から、日本と日本語が好きで学習したい学生は24.5%となっている。表4-3では、26.2%の学生が自主的に日本語を学習していると答え、表4-2に示した24.5%の学生の日本と日本語が好きで学習したいという結果と近い。

表4-2 第二言語として日本語を学ぶ動機

学習動機	日本と日本語が好きで学習したい	日本語が単位を取りやすい	外国語の単位が必要で仕方なく	友達が日本語を選んだから	その他
人数(名)	85	127	58	58	19
割合	24.5%	36.6%	16.7%	16.7%	5.5%

表4-3 日本語学習の自主性

学習の自主性	自主的、積極的に学習する	タスクを完成するため受動的に勉強する
人数(名)	91	256
割合	26.2%	73.8%

表4-2から、36.6%の学生がロシア語よりも日本語のほうが勉強しやすく、日本語の単位を取得しやすいと考え、16.7%の学生は外国語の単位が必要であるため仕方なく日本語を選んだことが分かった。この2つの項目を合わせると、半分以上を占めたため、多くの学生は、卒業に必要な単位を満たすために日本語を選んだものである。

同級生や仲の良い友達が日本語を選んだことを理由に日本語の勉強を始めた学生は全体の16.7%を占め、5.5%は、家族のアドバイスなど、他の理由で日本語を選択した。この学生たちは日本語学習への積極的な目的を持たず、他の人の提案に従う傾向があり、学習意欲はあまり強くないが、影響されやすく勉強するにつれ、学習意欲が増減する可能性もある。[日本と日本語が好きで勉強したい]と答えた以外の合計は75.5%であり、表4-3の[タスクを完成するため受動的に勉強する]と答えた学生の割合73.8%とはほぼ一致する。したがって、大多数の学生は学習意欲が低いように見受けられるため、教師は学習への関心を高められるよう、根本である学習の動機から見直す必要があると考える。

表4-4 日本語学習への興味

日本語への興味	ある	何とも言えない、 仕方なく	無い
人数(名)	162	135	50
割合	46.7%	38.9%	14.4%

表4-4は、第二外国語としての日本語学習への興味を示したものである。46.7%の学生が興味を持っており、38.9%の学生が学習への関心が低く、自主的に勉強できない。そして、14.4%の学生が日本語に興味が無いと答えた。このデータから、約半数の学生が第二外国語としての日本語学習に興味があり、約四割の学生が学習への興味が薄いことが分かった。日本語学習への興味はあるものの学習に対して、自主性を持っているのはその内の約半数であることが明らかとなった。

### 3. 第二外国語学習の目的

表4-5 第二外国語学習の目的

学習の目的	大学院進学	日本への留学、 旅行	中国での 就職に役立つ	日本の漫画、 ドラマ等が分かる
人数(名)	77	63	58	149
割合	22.2%	18.2%	16.7%	42.9%

表4-5は一年間の勉強を通じて、日本語を使う場面(学習目的)についての回答結果である。42.9%の学生は、日本語の学習が日本に関連する娯楽に役立つと考えている。この項目の割合が最も高く、文化要素も含まれる[日本への留学、旅行]と回答した18.2%の学生と合わせると、表4-1における[映画、漫画、ゲームなど]と回答した62.8%の近似値となる。



22.2%の学生は、第二外国語として日本語を勉強した結果、将来、大学院への進学を考える時、入試に役立つと考えている。大学院受験の際、外国語の試験が必須であるため、英語、ロシア語に比べれば日本語の方が漢字を用いる点で馴染みやすいと感じる一方で、受験者数も少ない。中国美術学院が公表した2020年の出願者データを見れば、受験者約3700名のうち、外国語を日本語に選んだのは382名しかいない。そのため、英語を選ぶより有利である。

#### 4. 日本語学習への時間投入、学習の難点

表4-6 授業以外で日本語学習に時間を掛ける内容

学習内容	単語、文法	聴解、会話	読解
人数(名)	289	41	17
割合	83.3%	11.8%	4.9%

表4-7 学習の難点

学習の難点	単語、語彙	文法	聴解	会話
人数(名)	66	224	23	34
割合	19.0%	64.6%	6.6%	9.8%

表4-6は、授業以外で日本語を勉強する際、83.3%の学生が単語の記憶と文法の学習に、11.8%の学生は聴解、会話に、4.9%の学生は読解に最も時間を費やすことを示した。普段の授業では学生はしばしば日本語に漢字が多いため、よく中国語に影響され、日本語の発音や、漢字の書き方を正確に覚えられない。「同文同種の国」と思い込み、中国人学習者は日本語を勉強する時、漢字に親しみを感じる。覚えやすい一方、間違いやすいところでもあるので、記憶に時間が掛かる。そして、単語と文法がテストに出題される大部分を占めているため、学生にとって時間を費やすべきものと考えているからと推測される。

日本語の初級学習において文法、形容詞、動詞の活用など、学生にとって難しい内容が大量にある。多くの学生は単語や文法に時間を費やす一方で、学生の16.7%は主に聴解、会話、読解の学習に時間を掛けている。総じてこれらの学生は、日本語レベルが比較的高く、学習意欲に富んでいるであろう。

表4-7が示すように、現時点で日本語学習の最大の難点としては、64.6%の学生は文法を、19.0%の学生は単語、語彙を選び、聴解と会話だと答える学生の割合はそれぞれ6.6%と9.8%を占めた。これは表4-6が示した83.3%の学生が単語と文法に、16.7%の学生が聴解、会話に時間を費やした結果と一致する。したがって、教師は授業において、単

語の記憶と文法の説明について現状以上に指導，監督し，学生の学習に効果的な方法を積極的に促すべきである。

## 5. 日本語の教科書

現在，対象大学で情報専門の学生の日本語教育のために使う教科書は，清華大学外国語学部によって編集され，外国語教育研究出版社から出版された『新世紀日本語（初級）』である。

この教科書は，大学外国語教育推薦テキストとして中国教育部に推奨された本であり，大学の第二外国語教育及び独学での勉強にも適すとされる。

調査によると，山東省済南市にある複数の応用型大学の第二外国語としての日本語授業はほとんど『新版中日交流標準日本語（初級上，下）』を使用し，対象大学も2018年以前入学した学生はそのテキストを使って授業を行った。『新世紀日本語（初級）』に比べれば，『新版中日交流標準日本語（初級上，下）』は内容が多岐にわたり，単語，読解，練習の量も多い。

例えば，仮名の学習に対し，『新版中日交流標準日本語（初級上，下）』は五十音図一枚だけで紹介されていたが，『新世紀日本語（初級）』では4回分に分け，発音や書き方を詳しく解説している。基礎学力が低く，学習の自主性に欠ける応用型大学の非日本語専門の学生にとって，一歩ずつの計画的な学習はより重要である。その面では，『新世紀日本語（初級）』の内容はより簡潔で，要点が明確で，情報量が適度であり，状況に応じた会話文も多いため，学生は日本語を勉強すると同時に，ある程度日本の文化，社会，経済などについても学ぶことができる。五学期連続的な学習を通じて，基本的な日本語文法体系の全体像をおおよそ掴め，よりしっかりとした日本語の土台を築けると思う。

表4-8 教科書の難易度

教材の難易度	難しい	適当	簡単	分からない
人数(名)	58	198	14	77
割合	16.7%	57.1%	4.0%	22.2%

表4-8から，日本語の教材（『新版中日交流標準日本語（初級上，下）』）について，学生の57.1%が教科書の難易度は適当であると考え，多くの学生がこの教科書を使っての学習に適應できることが分かった。16.7%の学生は難しいと答え，学習において理解できない内容があると推測する。簡単であると考えて，勉強に余裕を示した学生は4.0%しかない。また，22.2%の学生は教科書の難易度について分からないと答えた。それは日本語学

習の入門段階において、教科書の内容を把握するだけで精一杯であり、他の教科書および副教材などからの情報が欠如しているからであると推察できる。

## 6. 第二外国語の日本語学習成果

表4-9 日本語の学習成果

学習成果	たくさんある	少しある	なし
人数(名)	148	177	22
割合	42.7%	51.0%	6.3%

表4-9が示したように、学習の成果について“たくさんある”と“少しある”を答えた学生はそれぞれ42.7%と51.0%を占め、特に半数近くの学生がとても成果があると感じている。今までの日本語学習の内容は、まだ比較的簡単で取り組みやすいため、この段階では、学生の学習効果は良好である。ただし、6.3%の学生が成果がないと考えており、第二外国語であるため単位取得のみを目的とした等、日本語に興味を持たず勉強に取り組めていない可能性が高い。

表4-10 日本語学習で最も得たもの

得たもの	日本に対するイメージが変わった	日本語で簡単な会話ができた	日本の文化、風習を知った	日本のドラマを見たり、ゲームしたりするのに便利	その他
人数(名)	50	64	58	156	19
割合	14.4%	18.4%	16.7%	45.0%	5.5%

表4-10から、45.0%の学生は日本語を勉強すれば日本のドラマを見る際や、ゲームをする際に便利になったと答えた。これは、約半数の学生が日本の映画、アニメーション、ゲームなどに興味があり、日本語を学ぶことで、趣味に役立つと感じたことを示している。これらの動機付けは学習する際に良い方向へ導けば学習の原動力にもなることが可能であろう。14.4%の学生は、日本語を勉強したことで、日本に対するイメージが変わったと回答している。日本語学習を通して、日本の先進的な技術や文化などに触れ、日本という国をもっと客観的に見ることで、新しい発見ができたと考えられる。18.4%と16.7%の学生は、簡単な会話ができたことと日本の文化や風習を知ったことが良かったと感じている。言語学習において、実際に言葉を使用しコミュニケーションを図ることは重要な学習手法であり、日本語を使って簡単な会話をしたり、日本の文化や習慣を学んだりすることで知識の幅が広がる。これらの学習効果は得られやすいため、学生も達成感を味わえ、知識を獲得すると同時に、日本語を勉強する原動力に変えることが可能である。また5.5%

の学生が大学院入試などのその他の場面で成果があると感じている。

## 7. 第二外国語としての日本語授業に対する意見とアドバイス

表4-11 日本語授業に対する意見

意見	現状維持	更に力を入れる	授業数を減らす
人数(名)	234	63	50
割合	67.4%	18.2%	14.4%

表4-11が示したように、67.4%の学生は現今の日本語授業の進捗およびコマ数について今後も現状維持を望んでいる。18.2%の学生は学習の強度をもう少し高めてもいいと考え、14.4%の学生は授業を減らすべきだと回答した。カリキュラムの面では、週に4コマ約3時間をスケジュールしており、1学期に約64コマ48時間(祝日を除く)あり、授業時間は比較的十分である。

表4-12 日本語学習に役立つ勉強法

勉強法	真面目に授業を受け、 教師に言われた通り 勉強する	日本語塾や、 ネット授業により 計画的に勉強する	日本のアニメを見たり、 歌を聞いたり、 ゲームをしたりする
人数(名)	262	22	63
割合	75.5%	6.3%	18.2%

表4-12のデータから、75.5%の学生が日本語の学習に一番いい方法は真面目に授業を受け、教師の指導通りに勉強すると答えた。18.2%の学生は、アニメを見たり、日本の歌を聞いたり、日本のゲームをしたりすることで、日本語の成績を向上させられると考えている。これは学習にとって良い動機付けになる可能性が高いが、歌やアニメーション、ゲームなどは日本語特有の曖昧表現が使用されており、それらについての解説も無いため、あくまでも学習する際の補助手段であることを指導する必要がある。

また、6.3%の学生は課外で日本語塾に通ったり、ネット授業を受けたりすることを日本語学習に取り込み、成績を向上させる効果があると考えている。しかし、ネット授業や、日本語塾の講師の日本語能力が保証できないことは大きな問題である。きちんとした日本語教師を雇わず、日本語専門の大学生や、第二外国語として日本語を勉強した経験しかない教師しかいないところも珍しくない。それに影響され、学生は正確な発音ができず、文法知識に対する理解への偏りが見受けられる。言語学習における初期の思い込みを修正することは困難であり、大学での日本語学習を妨げる場合がある。

表4-13 日本語授業の形式へのアドバイス

授業形式	学生の自習をメインに知識を獲得する	教師の指導の下で、学生が自主的に勉強、実践する	教師が授業を行い、学生は聴講する
人数(名)	29	268	50
割合	8.4%	77.2%	14.4%

表4-13から大多数の学生が、教師の指導の下で学生が自主的に勉強、実践し、新しい知識を得ることを望んでいることが分かる。教師を中心に行われる授業の形式がいいと思っている学生は14.4%にすぎず、8.4%の学生は、教師がタスクを与え、自習を通して新しい知識を身に付けたいと考えている。表4-13のデータは、言語学習において、教師主導の学習だけでなく学生自身が自ら主体となり、実際に日本語を使用し、適宜修正されることに効果があると学生が考えていることが顕著に表れている。これは今流行の教師の指導の下での学習者を中心とした授業方式であり、学生は受動的に知識を受け入れる者から能動的に知識を構築する者になる。したがって、これからの授業では、授業方式の変更が必要になり、学生の勉強への関心を刺激し、学習意欲を高め、学習動機の形成を手伝う必要が一層求められると考える。

表4-14 日本語の授業方式へのアドバイス（複数回答可）

教授法	オンライン学習	グループ学習	ロールプレイ	マルチメディア学習
人数(名)	297	262	162	339
割合	85.6%	75.5%	46.7%	97.7%

表4-14は学生が希望する授業方式をまとめたものである。97.7%の学生はマルチメディアを多く使ってほしいと回答した。現在、マルチメディアが様々な授業に使われ、学生にとって親しみやすい存在であり、オーディオ、映像、授業内容に関係あるアニメーション、歌を流すことで、学生の勉強への興味を高められる。また、表4-12にて回答された日本のアニメを見たり、歌を聞いたり、ゲームをしたりするという学生に対して、適した教材の提供を行うことが可能であり、学習の幅が広げられると考える。さらに、85.6%の学生がオンライン学習へ興味を示している。MOOC<sup>3)</sup>、Micro Lesson<sup>4)</sup>等と授業を結合し、補助として使えば、学生はスマートフォンのゲーム感覚で予習、復習を行い、学習の効率と興味を高めることができる。現在のような誰もがスマートフォンやパソコンなどを利用する環境下であれば、オンライン学習は学習者にとって受け入れやすい手法であると考えられる。75.5%の学生はグループ学習も積極的に考えている。例えば日本語の能力が異なる2～6名の学生でグループを作り、協同しながら学習目標を達成する。授業中でも、グ

ループ学習の内容を取り入れ、学生が参加することで、教室の雰囲気改善ができる。46.7%の学生は日本生活を想定したロールプレイがよいと考えている。様々な場面で、学生の多様な感覚を刺激し、興味を引きつけられる手法である。更に、学生の授業参加を促進し、学習への関心を刺激することで、自主的な学習の実現に繋がる。表4-14において、主体的になることで学習意欲の向上および、その成果が得られると学生は考えていることが伺えた。

## (二) インタビューの整理と分析

インタビューを通じて、この応用型大学の情報専攻への第二外国語としての日本語の教育における多くの問題がより明らかになった。

### 1. 学生インタビュー分析

学生インタビューの回答をまとめると、学生にとって日本語学習における主な問題は下記の通りである。

- (1) 第二外国語としての日本語学習への興味と学習動機について、学生の回答は学習への関心は低く、功利主義的な動機が主流となることを反映した。グループインタビューでは、第二外国語は必修科目で仕方なく選んだなどの意見があった。また、21名の学生はロシア語より日本語のほうが簡単で、単位を取りやすいため、3名の学生は大学院入試の外国語試験に日本語を選択できる大学が多く、英語で受けるより有利であるため履修したという意見もあった。アニメが好きで日本語が好きになったと答えた学生が9名いるが、それらにより日本を意識するまでには至らず、学習意欲が継続されるほどの興味が無い。新しい言語なので、毎週日本語の授業を楽しみにしていたが、ただ、勉強が難しくなるにつれて、特に学期の後半には日本語の語彙変化が多くなり、興味が失せたとの意見も多かった。
- (2) 授業以外の日本語学習へ費やす時間について、専門関係の勉強があるため日本語の勉強には限りがある。インタビューでは、学生のほとんどが授業後復習をせず、多くても週に1回復習するか、授業だけで学習する。多くの学生は専門関係の資格を重視しており、それらの資格を取るために他の授業に掛ける時間がないと回答している。そのため、学生は日本語学習に予習復習が必要である意識がなく、知識が身に付きにくい。
- (3) ほとんどの学生にとって日本語学習における最大の難点は単語と文法である。一部の学生は基礎が弱く、勉強する方法が分からないままである。また一部の学生は学習態度が悪く、勉強時間が短いことが分かった。このような問題に対し、多くの学生は積極的

に解決する意識がなく、放置してしまうことで問題がどんどん深刻化し、日本語を諦める傾向があった。

- (4) 授業に対する満足度と意見については、教師の日本語のレベルが高く、専門知識の説明が分かりやすいとの評価が多かった。しかし、教師や教材を中心とした伝統的な教授法を用いた授業は単一で、面白みに欠けているとの意見もある。教師が主導する授業では学生は疲れやすく、学習への興味が失われやすいため、多様な方法を使い、学生の学習への関心を刺激することを意識する新しい指導方法が望ましい。また、教師の監督が十分ではないと考えた学生も多い。教師が口述する授業形式はつまらないので、授業中よく眠ってしまうと不満を漏らし、関連する動画、アニメ、音楽を流すなど多様な形式が望ましいようである。しかし、このような授業展開を実施するには学生の日本語レベルについて、ある程度の水準以上が必要であり、日本語の初心者には適さない。授業中日本語で質問に答えたり、話したりするのがスムーズに行えず、予定されている授業の進捗状況に支障を来すデメリットがある。

- (5) 教科書については、一部の学生が内容が固くて面白くないと答えた。例えば漫画形式のものであれば、学習前の語彙であったとしても絵や吹き出し（対話）の流れから推測することができ、記憶に定着しやすいとの意見もあった。少数の学生は、日本語の知識が少ないため、教科書が適切かどうか判断できないと答えた。

- (6) 学生が期待する授業について、これまでの伝統的な授業に新しいものを追加することを要望する者が多いことが分かった。オーディオや映像などのマルチメディアの活用、スマートフォンの学習アプリの推奨、ロールプレイの展開などが強く求められた。多くの学生は日本文化に関連する内容に興味を示し、日本文化、社会をテーマとした講演、茶道の実演、文化祭などの行事のシチュエーションでの会話練習が提案された。

指導の面では、教師数が不足しており、現在数クラスが合同で授業を実施している。少人数クラスが望まれる外国語学習にとって、一クラスあたり50～60名と学生数が多いため、教師が学生の反応を見て個別に発音を直したり、文法の理解度や記憶力を確認したりするのは不可能である。そのため、しっかりとした日本語の基礎を築くには不安要素が多く、教師からより綿密に指導を得たいという意見が聴取された。

- (7) 日本語学習の成果については、一定期間の学習をした後、学生たちはある程度の成果が得られ、[大学院入試の基礎を築いた]、[アニメを見て、言葉や簡単な文章が理解できた]、[自分で日本へ旅行に行く自信がついた]、[徐々に日本語学習への興味を深めた]との意見が多く見られた。そして、日本語を勉強することで日本という国を知り、親しみを感じるようになったとの答えも少なくない。

## 2. 教師インタビュー分析

教師へのインタビューでは以下の意見・要望が見られた。

- (1) 対象大学の第二外国語としての日本語を教える教師の日本語レベルについて：全員5年以上の経験があり、日本文学専門が多く、学歴としては、修士、学士、海外留学経験者もいる。
- (2) 教師の指導方法について、すべての教師は教師中心で授業を展開している。学生を中心とした指導法を試みたが、応用型大学に在学する学生の学力では限界があるため、実施することが困難である。教師は「学生の基礎学力が弱く、授業時間が限られているため、教室でディスカッションや、会話練習が行えない」と話した。学習タスクを残し、学生の自主学習を導こうと試みた教師もいたが、学生の自己学習能力の欠如に加え、日本語能力が低いいため、予想した効果は得られなかったようである。
- (3) 教師の仕事量とカリキュラムの妥当性について、教師の仕事量は多く、平均週20コマ（15時間）以上ある。教師の仕事の負荷は大きく、学生の反応に応じて授業をするのが難しい。授業で発見した問題をすぐ解決できず、学生の監督が十分に行えない。大人数の合同クラスでは、授業中に学生が日本語を話す機会もほとんどない。そして、様々な事情によりカリキュラムが勝手に変更されることで、授業計画が乱され、学習効果が保証できないのも深刻な問題と見なされる。
- (4) 学生の質問への回答について、学生に質問された場合、教師は積極的に回答するが、問題を発見し解決しようとする学生は珍しく、ほとんどの学生は質問をしない。複数の教師は「普段の授業で学生たちが分からない問題が多いことを発見したため、毎週個別回答する時間を設けたが、質問に来る学生はいない」と話した。こうした状況になったのは学生が正しい学習習慣を身につけておらず、授業後に勉強した内容を復習しないことに原因があると分析する。そして、一部の学生は問題を溜め過ぎることで、どこが分からないかも把握できていないとも言う。
- (5) 教科書の選択について、教科書の難易度は適切で簡潔であるが、内容が比較的古く面白みが足りない。今の日本を紹介する資料等を補助として使う必要があることを示唆した。2018年9月から使われるようになった『新世紀日本語（初級）』について、語彙、文法、例文などの内容が適切であるが、会話文の話題や、レイアウトの面白さが足りない。応用型大学の日本語を勉強し始めたばかりの学生にとって、興味を引けるものではないかもしれないとの意見もあった。『新世紀日本語（初級）』は従来使われてきた『新版中日交流標準日本語（初級上、下）』と比べると、内容がより簡潔で分かりやすく、実用性が優れているが内容は古くて単一であるため、授業中に時事、アニメ、日常会話



などを補う工夫が必要である。

- (6) 仕事に対する要望と授業状況を改善するための意見、提案について、インタビューでは教師が学習、研修する機会はほとんどないので、それを強く希望することが分かった。研修などの活動を通して、様々な刺激を受けることで、教師の視野が広がり、指導能力を向上させられると考える。そして、教師の仕事量が多すぎれば、授業の質を保証できず、教師自身の学習と研究にも不利であるという意見も多かった。学生の学習効果を保証するために、実現可能な授業計画を作成し、厳正に実施することは基礎となる。

学校の監督システムには柔軟性がなく、評価基準が一律に決められ、評価の公平性が問われる。評価結果を追求すれば、新しい試みを行いにくい。そのため受講生の専門、授業の類型によって基準を作成することで、より客観的な評価結果が得られる。大学側にとって一番力を入れるべきなのはカリキュラムの構築と教師のサポートを強化することであると考ええる。

## 五. 結論と展望

### (一) 問題点

山東省済南市にある某応用型大学をモデルに、アンケート、インタビューを通じ、日本語教育の現状を調査したところ、以下の問題点を発見した。

1. ほとんどの学生の学習動機は功利的で、常に日本語学習に興味を持ち続けることは困難である。
2. 学生は日本語を学習する意欲が不十分で、勉強への関心が低い。自主的に勉強できず、良い学習習慣を身につけていない。
3. 学生は学習するにあたり明確な目標を持っておらず、勉強へ重視が足りない。
4. 教科書の内容は古く、適時性に欠けている。
5. 教師の仕事量が多く、学会参加などの学ぶ機会がほとんどない。教育能力の向上にはつながらない。
6. カリキュラム、シラバスは不完全であり、簡単に調整され、授業の時間は保証できない。
7. 学校の監督システムに柔軟性がなく、教師の授業形式は単一なものである。

### (二) 応用型大学第二外国語としての日本語教育対策

将来、第二外国語としての日本語の教育レベルを向上させるために、大学（環境面）と教師（指導面）の二つの部面から改善策を探ってみたい。

## 1. 大学（環境面）

- (1) シラバスの要求を満たし、第二外国語としての日本語教育の質の向上を計る。そのため、教師を増やし、大人数の合同クラスを無くすなどで、授業に余裕を持たせる。
- (2) 教師の育成に力を入れ、研修、交流、学会参加などのチャンスを積極的に提供し、刺激を与える。教育理念と知識を常に更新させる。
- (3) 監督と評価のシステムをより柔軟で効果的なものにし、教師の授業革新を支持、サポートする。日本語授業の形が多様であることを認識し、授業中のマルチメディアの使用を制限しない。
- (4) 第二外国語として日本語を勉強する各専攻の学生に対し、その専攻の特徴、学習目的に適したカリキュラムを作る。学生にとって役に立つ日本語授業を提供する。

## 2. 教師（指導面）

- (1) 教師は常に自己研鑽を行い最新の日本語知識を意識し、様々な内容を授業に取り入れることで、授業能力を向上させる。
- (2) 学生と良い関係を築く。学生の特徴に応じた授業を行い、学生の勉強への関心を刺激する。監督と励ましを強化し、学生に自信を与え、学生の学習への関心を育むことを意識する。
- (3) 複数の授業方法を組み合わせ、学生の反応を観察する。より柔軟に指導することで、授業参加への積極性を高め、学生に明確な学習目標を提示する。知識を教えると同時に学生の自主学習の意識と良好な学習習慣の養成に努力する。
- (4) 教材の更新、参考書の補充を迅速に行えるよう大学へ提案し、授業内容が時代に合う実用性のあるものを確保する。

山東省済南市にある某応用型大学の情報専門の学生をサンプルにすることで、研究対象はより具体的なものになった。従来の第二外国語としての日本語教育に関する研究は主に研究型大学の英語専門の大学生を対象としたものであり、応用型大学とは異なる問題がある。近年、応用型大学は高等教育の普及に大きな役割を果たし、学生の数も大きな割合を占めている。したがって、この論文の研究内容は応用型大学における第二外国語としての日本語教育の模索に役に立つことを願う。

今回の調査では、コロナ禍の影響により、コンタクトを取っていたもう一つの応用型大学でのアンケート調査ができなかったため、応用型大学における第二外国語としての日本語教育の共通点を探り、より説得力のある研究ができなかった。今後は、数多くの応用型大学で調査を行い、応用型大学の日本語教育における様々な問題を把握した上で、文化教

育, 及び異文化コミュニケーション能力の育成に関する研究に取り組んでいきたい。

〈注〉

- 1) Tencent Meeting (騰訊会議) は中国でよく使われる人気ビデオ会議ツールのこと。
- 2) wechatは中国で一番使われるメッセージングやソーシャルメディア用のアプリのこと。
- 3) MOOC (Massive open online course) は, インターネットを利用した大規模なオンライン講座を意味する。
- 4) Micro Lessonとは, 課題を分割して, 短い時間で, オンラインで不特定の講師と繰り返し学習すること。

参考文献

[和文]

- 迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 瀬尾匡輝(2011)「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る－」『日本学刊』第14号, pp.16-39
- パッツィ・M.ライトバウン, ニーナ・スパダ [著]; 白井恭弘, 岡田雅子訳(2014)『言語はどのように学ばれるか－外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』岩波書店

[中国語]

- 陳媛媛(2011)「談高校二外日語課程教学方法－以提高學生興趣為中心」『語文學刊(外語教育教學)』(12), pp.152-153+158
- 韓冰, 江春華(2012)「綜合大學二外日語教育的問題與對策」『日本問題研究』26(04), pp.54-59
- 姜丹(2013)『日語學習效果的測試分析－以英語專業學生的第二外語學習為中心』長春工業大學碩士論文
- 石玉芳(2011)「關於高校二外日語教學現狀與改革的思考」『西南農業大學學報』9(10), pp.145-146
- 孫敏(2015)『網絡資源在高校二外日語教學中的應用策略研究』江西農業大學碩士論文
- 王婉瑩(2005)「大學非日語學生日語學習動機類型與動機強度的定量研究」『日語學習與研究』(03), pp.38-42+46
- 吳凱(2014)『大學二外日語教育的現狀, 問題與對策』南京師範大學碩士論文
- 修剛(2008)「中國高等學校日語教育的現狀與展望－以專業日語教學為中心」『日語學習與

- 研究』(05), pp.1-5
- 許文娜(2016)「独立学院的二外日語教学現狀分析与改革措施」『教育教学論壇』(33), pp.112-113
- 尹志紅(2015)「高校二外日語教学現狀分析极其对策研究」『河南广播電視大学学報』28(03), pp.94-96
- 国連教育科学文化組織(2011)「國際標準教育分類」(<http://www.uis.unesco.org/EDUCATION/pages/international-standard-classification-of-education.aspx>.)
- 国务院(2014)「關於加快發展現代職業教育的決定」([http://www.moe.gov.cn/jyb\\_xxgk/moe\\_1777/moe\\_1778/201406/t20140622\\_170691.html](http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/moe_1777/moe_1778/201406/t20140622_170691.html))